

## 清潔好きには盲点がある

LL 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

BS海外ドラマ「名探偵モンク」の再放送が始まった。私は、モンクの清潔マニアぶりを見るのが好きで、このドラマをよく見ている。探偵劇としての興味よりも、むしろこちらの興味のほうが強いくらいだ。と言うのも、「清潔好き」とか「清潔マニア」と言われる生き方こそは、現代社会での最大のドラマだからである。

「清潔」という言葉を軽い意味だけで受け取らないでほしい。「名探偵モンク」のイントロのシーンで以前に使っていたものだが、こんな場面があった。

モンクがゴミ回収車の後ろへ回ってゴミ袋を捨てようとする、中から沢山のゴミの塊が運び落ちてきて、モンクは押し倒されてしまう。不潔なものには指一本触れるのもイヤだという彼が、ゴミの中に体を埋めてもがいている姿がなんとも象徴的だった。

イントロのシーンにはこの他にも、排水管から汚れた水がモンクの頭にかかってくる、彼の肩にドブネズミが落ちてきたり、と皮肉な場面が続くのだが、彼が清潔を求めれば求めるほど、周囲からは容赦なく不潔なものが襲いかかってくるという設定だ。

おそらく、「これが社会だ」とドラマの制作者は言いたいのであろう。そう言えば、探偵を仕事とし、警察を助けて犯罪と戦うという立場も、社会から汚れを無くし、キレイな人間関係を作り出すとする情熱なしには考えられないであろう。

「清潔好き」もしくは「清潔マニア」の精神が原点にあつてこそ、社会が、政治が、歴史が動いていく。それに対する不潔なものや汚れたものの反撃がドラマを作り出すのだ。この世は、清潔なものと不潔なものの戦いだと言ってよいだろう。

それはまさしく善悪の戦いにほかならないと人は思うに違いない。まさにそうなのである。私たちは通常、善なるものを清潔と感じ、悪なるものを不潔と感じる。私たちの日常生活は、この直感によって支えられているのだ。しかし、問題は、この直感が正しいかどうかであろう。

自分が清潔好きだと思い込み、善なるもの、正しいものを追求していると思っていると、思わぬところから不潔や悪の逆襲を受けることになる。それによって、時には、自分の直感の頼りなさを思い知らされるのだ。

ゴミ袋をわざわざ回収車の投入口まで運んで行ったモンクが、崩れ落ちてきたゴミに埋まってジタバタしているさまを象徴的だと言ったのは、まさにこういう意味なのだ。探偵も時には、無実の人を疑ったりして、自分の直感の盲点を思い知らされる。清潔と不潔の戦いは、まずは自分自身の中にある。

日本人は清潔好きだと言われ、自分でもそう思い込んでる人が多い。しかし、本当にそうなのだろうか。身体的にキレイであろうとする人は確かに多いように見える。内容よりも形、内面よりも外面を重んじるのは、これもまた日本人の特質と言えるからだ。

しかし、精神的にも「清潔好き」と言えるかどうかということになると、だいぶ怪しくなってくる。

先日見たBSのクール・ジャパンでは、或る外国人が最初に日本を訪れた時、無くしてしまったカメラが遺失物案内所から戻ってきたことにいたく感動し、それから日本が好きになったと語っていた。

他の国ではどうてい考えられないことだこの外国人は言っていた。確かにそういう潔癖さ、正義感は日本人にはあると言える。日本では地震などの災害時に略奪が起こらないことも有名だ。

しかし、それだからと言って、日本人が精神的にも潔癖だとか「清潔好き」だとは言えない面もある。表面的、外面的には格好をつけていても、もう一步踏み込んだところでは何をやり出すか分からないといった人々も多い。

例えば、外国の税関吏のように直接賄賂を求めるようなことはしないが、こっそり隠れて私腹を肥やすような役人ならいくらでもいる。他者を直接あからさまに傷つけることはしないが、間接的に、人目につかない形でならば平気でできるといった、いわば潔癖感の使い分けが可能なのだ。

上流階級を志向し、形を重んじていた名門飲食店が、こっそりインチキな商売をやったり、個人的には人格者で通っていた有能な役人が、裏では多額な賄賂を受け取ったり、国を代表する立派な企業が、政府からたっぷり助成金を受けて開発した技術をひそかに外国に売り渡したりと、数え上げればキリがないほどの清濁の混乱がある。

私たちは、善とは何か、悪とは何かということをもっとよく考えてみる必要があるのだが、「名探偵モンク」というドラマは、清潔マニアの探偵を主役に配することで、この問題へのアプローチを日常的なレベルで可能にしてくれる。

と言うのも、先ほども述べたように、私たちが善悪の認識に取り組むためには、清潔・不潔の直感から出発するほかはないからだ。何が清潔で、何が不潔かというごく卑近な問題から出発することで、善悪の意味が、根源的な深いところから見えてくる。

11月27日に放映された第一話にも、いくつかの印象的なシーンがあった。その一つは、モンクがいつも見せるお決まりの行動で、特に目新しいものとは言えないが、他者との握手を嫌う場面である。

彼は、誰かと握手することを極端に嫌うのだが、その理由は、相手の手と触れることを不潔と感じるせいなのか、それとも敵意を感じる相手との肉体的な接触を嫌うせいなのか、私がこれまでのシリーズで見たかぎりでは、あまりはっきりはしていなかった。

彼は、この話に登場するもう一人の私立探偵と握手をするのだが、そのあとすぐに助手のナタリーからティッシュをもらって、自分の手や指を拭きまくる。

これは、他者の手が不潔だという単に肉体的な理由によるものではないであろう。助手ナタリーの指も、外部の世界に接触しており、決して清潔とは言えない。しかし、ナタリーの掴んだティッシュは許せるが、初めて出会った相手の私立探偵と握手するのは耐えられない、といったところが

モンクにはあるのだ。

と言って、相手に敵意を感じるという精神的な理由があるわけでもない。有るものと言えば、いま初めて会ったばかりの未知のものに対する拒否感であろう。助手ナタリーとはいくら手が触れ合っても平気なのである。

未知のものを不潔と感じる。あるいは悪と感じる。しかし敵意はない。敵意があれば、無理をしなくても相手と握手をしようなどとは思わないからだ。こうして、モンクは、自分の「清潔好き」の衝動を抑えてでも、他者との関係を守らざるを得ないことになる。つまり、礼を守るほうを選んだわけだ。

12月19日の第四話では、知人とテーブルを囲んで話をする場面で、モンクは皿に盛られたクッキーを指でつまんで食べる振りをして見せる。そこにいるのは未知の人たちではない。彼は、汚れた指で食べ物に触れたくないという自分の「清潔好き」を隠してでも、人間関係を大事にする方向を選ぶのである。

社会生活をする上で、個人の「清潔好き」には限界があること、また盲点があることを、モンクの行動は如実に示しているのだが、このことは、ドラマ制作者が意図して描き出したことばかりではないであろう。予期せぬ意味づけが随所に出てくる点も、このドラマの面白いところである。

第一話で印象的だったもう一つの場面は、ナタリーが買い物袋を抱えてキッチンに入ってきた時のシーンだ。彼女は、その紙袋をテーブルにじかに置き、中から何本かの瓶を取り出して棚に並べる。そうすると、モンクが走って行って、それらの瓶を並べ直すのだ。

このブログ・マガジンでも何度か書いていることだが、欧米の清潔観念には、日本で言う「清潔」の意味の他に「整理・整頓」ということも含まれている。助手のナタリーが並べた瓶を、モンクが整理整頓し、バランス良く並べ直すところに、彼の清潔マニアとしての本領があるのだ。

ところが、清潔マニアなら当然気にしてよいようなことについて、モンクはまったく無頓着だった。一つは、ナタリーが台所のテーブルに買い物の袋をじかに置いたことである。もう一つは、外から持ってきた瓶に彼自身平気で指に触れたことである。

人との握手を嫌って、ティッシュで手を拭きまくることから言えば、モンクが何よりも嫌ってはいはずの行為が、すんなりまかり通っている。これは、モンクのと言うよりも、ドラマ制作者の「盲点」だったのであろう。

これほどまでに、「清潔」の問題は微妙なものを含んでおり、簡単には片付けられない奥深さを抱えている。社会生活をする上で、どこまでそれを求めればよいのか、どこに盲点があるのか、よく考えてみる必要があるだろう。

日本人は清潔好きだと簡単に言ってしまう前に、その「清潔好き」の意味をもっと深く掘り下げてみても良いのではないだろうか。

[2007/12/20 magmag]